

厄災の悪役令嬢

レティシア・ドンバッセル



Daijubukin
大福金

Illustr. riritto

Leticia
Donbassel
the villainous daughter
of disaster

II

Leticia
Donbassel
the villainous
daughter
of disaster

レティシア◎
ドンバッセル

本作の主人公。
ゲーム「エデン」の世界に
転生した辺境伯家の令嬢。
ラスボスになる運命を回避して、
平和な日常を送りたい。

ダクネル◎ドンバッセル

レティシアの父。
最強の軍事力を誇るドンバッセル家の当主。

ライオス◎テールバイ

テールバイ帝国の皇子。
呪いにかけていたが、
レティシアに救われた。

レティシアが訪れたパーティーに
居合わせた、謎の女の子。

?????

クロエ◎ルシフェル

稀代の聖女と呼ばれる、
ルシフェル公爵家の令嬢。

おもち

レティシアの相棒のファンリル。
前世では彼女の愛犬だった。
美味しいものならなんでも大好き。

★急いで帰らなきゃ！

「よし、今日はアリアロス街で休憩だな」

アリアロスの街に着くと、お父様たちが馬車から下りてきた。

私——レティシアは、前世は愛犬であり今世は聖獣フェンリルでもあるおもちの背に乗って、馬車の後をついていっていた。

馬車に乗るより、おもちの背に乗る方が快適なのだ。

なんてって【創造魔法】で創ったスキル【エアシエルター】のおかげで、快適空間のまま背中に乗っていられる。本当、魔法って便利だなあ。

そう、この世界には魔法がある。

私には前世があった。仕事帰りに家が燃えていることに気づき、おもちを救おうとして飛び込んだのが最後の記憶だ。

おそらくその時に私は死んだのだが、いつの間にか前世でめちゃくちゃハマったゲーム『エデン』の世界で、のちに厄災の悪役令嬢と恐れられるドンバッセル家のレティシアに転生していた。

記憶を取り戻した私は現在、前世の知識を活かして、破壊の道をたどるレティシアの運命を変えようというわけで。

先日も、エンディバン王国から魔導船に乗って砂漠の帝国ターバイにやってきた。皇妃様の病を治したり、なぜかアクダマス侯爵の悪事を暴いたり、アリアロスで誘拐されたりと大忙し。

それからアクダマス侯爵領で後始末を済ませ、今は帝都への道中にあるアリアロスに戻ってきたところだ。

お父様、ドンバツセル家の四男のジュエルお兄様、ターバイの皇帝陛下、その息子で皇子のライオス、そしておもちも一緒である。

このアリアロスの街では、ちょっと苦い思い出（誘拐）もあるけれど、この街は屋台が有名で凄く楽しかった。それに、食いしん坊のおもちと一緒に屋台を回りたいと思っていたので、今日の夕飯は凄く楽しみ。

「私たちは少しやることがあるので、レティたちは先に夕食を屋台で食べてくるといい」「分かりました！」

お父様たちは、以前に宿泊した豪華な宿泊施設に歩いていった。アクダマス領でのことを、宿泊施設でまとめるらしい。

街に着いて早々お仕事だなんて、いろいろと大人は大変だなあ。

皇帝陛下は私たちと一緒に屋台で食べてきたらって言うてくれていたのに。情にあついお父様らしい。

別れぎわに「仕事終わりに、皇帝陛下と飲み歩きをするのを楽しみに頑張る」とニカッと笑いながらコツコツ話してくれた。前にこの街に来た時も、楽しそうに飲み歩きしてたものね。

「さあて、屋台に行こう！」

「うん！」

ライオスが私の手を引き、屋台までエスコートしてくれる。

『こここっ、こりえは！ すんごいつちいいい』

おもちがヨダレを垂れ流しながら、瞳をキラキラと輝かせている。いろんな香りに、鼻をびくびくとご機嫌に動かす。

『うんまそーな匂いがいっぱいいいい！』

「でしょでしょ。いっぱい食べようね」

『食べるうう！』

興奮のあまり、おもちのしっぽが高速で回転する。

そんなおもちの姿を見たライオスとジュエルお兄様は、屋台へと走っていく。

「おもち様、いっぱい食べようね」
つと、ジュエルお兄様がさつそく串焼きくしやを持ってきてくれた。

「レティも食べて！」

「お兄様、ありがとう」

美味しいなあ。外で食べているからか、二倍美味しく感じる。

『この肉、うんまいっつい！』

串焼きは香辛料強めな味付けなんだけど、このピリツとした胡椒こしやうのキツイ感じが、肉汁の多いお肉と合う！

何本でも食べられそう。

「レティ、これは僕のおすすめなんだ。食べてみて。おもち様とジュエル様も、どうぞ」

「これは？」

「ふふ、今一番のお気に入りなんだ」

それは、前世でいうところのナンのような生地きじに、何かが包まれている。

外はカリツと焼かれていて、食欲をそそる美味しそうな甘い香りがする。

「んん〜！ もぐもぐ、ごっくん」

あまりの美味しさに声こゑが漏れる。

「美味しっ！ ライオス、これめつつちゃんこ美味しい」

「でしょー？ 今人気の肉巻きっていう食べ物なんだ」

肉巻きは、もっちりとしたナンのような生地の中に、角煮かどのような肉の塊かたまりが包まれている、その

肉と生地の相性が最高！ これぞ食のハーモニー！

おもちとジュエルお兄様も、無言で噛み締めかみしめている。

「ライオス様！ この肉巻きはどこで売っているんですか？」

「ええとね、あの右側にある屋台の方に行ったら奥にあるよ！ 肉巻きの大きな看板があるから分

かと思う」

「分かった！ ありがとう行ってくる」

残った肉巻きを口に放り込むと、ジュエルお兄様は屋台に向かって走っていった。

『待つっつい！ わりえも行くっち』

その後をおもちが追いかけている。

ふふふっ、おもちとジュエルお兄様は、肉巻きが相当気に入ったみたいね。

その気持ちよく分かる！ でもこれなら私も作れそう。

そうだ！ ドンバツセル領に戻ったら、最高の肉ジュエルポアで角煮を作って、この肉巻きを再現してみよう。



きっとジュエルボアで作ったら最高に美味しいはず！

「ぐふふ……」

「レッ、レティ？ どうしたの急に」

しまった、想像してニヤニヤしてしまった。

「なっ、なんでもないよ！ さっ、私たちも屋台探索に行きましょう」

「そうだね！」

ふうくなんとか誤魔化せた。

その後、いろいろな屋台を食べ歩き、大満足で宿泊施設へと戻った。

—— んん？

宿泊施設に戻ると、馬に騎乗したテーバイの騎士たちが馬から下り、慌ただしく中に入っていく様子が見えた。

何かあったのかな？

「あんなに慌てて、どうしたんだろう？」

ライオスも不思議そうに騎士たちを見ている。

そうだよね、気になるよね。

「私たちも行ってみよう」

「うん、そうだね」

私たちも騎士に続いて宿泊施設の中に入った。

扉を開けると、ちょうど皇帝陛下とお父様が宿泊施設の広場に下りてきたところだった。騎士たちが二人に駆け寄っていく。

お父様たちは、屋台にお出かけする直前だったみたい。騎士の人たちとなんの話をしているんだろう？

お父様の顔がどんどん険しくなる。これでもしかして、よからぬことなんじゃ……

それはジュエルお兄様もライオスも察していて、なんの話をしているのか気になるが、近寄ってはいけない雰囲気はどうしていいのかわかっている。

話が終わったのか、騎士たちはお父様たちから離れ、宿泊施設を出ていった。

周りに人がいなくなり、お父様と皇帝陛下が私たちに気づく。

「ジュエル！ レティ！ ちょうどいい、探しに行こうと思っていたところなんだ」

お父様が慌ただしく近寄ってきて言った。

何があったの!?

「二人とも、申し訳ないが宿泊はできない。急いでドンバツセル領に帰らないといけなくなっちゃった！」

お父様は早口で話しながら、私とジュエルお兄様を外に連れ出す。

「ええ!? 何があったのですか?」

ジュエルお兄様が問う。

何があったのか気になるに決まっている。

「緊急事態なんだ。今すぐ馬車に乗って、いったんデーバイ帝都まで帰る！ 詳しくは馬車の中で話すから、ついてきてくれ」

お父様のただならぬ様子に、今はこれ以上聞けないと私たちは領うりやうく。

「分かりました」

一体ドンバツセル領で何が起こっているの!?

★

事後処理のためアクダマス侯爵の屋敷に残っていたドンバツセル領の騎士——赤い強騎士たちも急いで集合し、私たちの後を大急ぎで追いかけてきてくれている。

私たちは馬車だけど彼らは騎馬なので、帝都に着く前に合流できるみたい。

馬車の中、空気が重い……

私とジュエルお兄様は、お父様が口を開くの黙って待っていた。

お父様のあの様子、絶対に尋常ではない。

「実はね……」

ゴクツ……

「エンディバン王国の王都に近い森で、スタンピードが起きたみたいなんだよ。そしてその魔獣たちは王都目掛けて真っ直ぐに走ってきているらしい」

「スタンピード!?」

「……そうだ」

王都に近い森には、強い魔獣がいはいはず。魔獣は空気中に漂う魔素を好む。強い魔獣ほど、多くの魔素を欲する。

ドンバツセル領にある深淵の森は、魔素が中央に行くほどかなり濃い。なので強い魔獣は深淵の森に多くいるのだ。

それとは逆に。

王都に近い森は、魔素が薄いので低ランク魔獣しかいない。

だから……お父様がこんなにも動揺するのはおかしいのだ。

「王都に近い森は低ランク魔獣しかないので、スタンピードが起きてても、王都にいる騎士たちで、

どうにか対処できるのでは？」

ジュエルお兄様も、私と同じことを思ったようだ。

「それが……聞いた話だとAランク魔獣やBランク魔獣が、かなり多くいるらしいんだ。スタンピードを察知した、王都の魔術師たちがそう鑑定したらしい。AランクやBランクが多く交ざったスタンピードなど、王都の騎士団では対応できない」

確かに。王都の騎士団は、Aランク一体やBランク数体ならどうにかできるレベルだと、ドンバツセル領の騎士たちを束ねる騎士団長が、以前話してくれたのを思い出した。

『だから俺たちが守ってやってるんだ。だが、あんまりにも簡単に俺たちが倒しちゃうから、あいつら感謝の気持ちも薄れてやがるがな』

って愚痴まじりに言ってたな。

「ドンバツセル領に緊急で伝令が来て、領に残っている赤い強騎士たちが向かっている。ギリギリだが間に合いそうだ」

——そうだった！

今のドンバツセル領に居るのは、最強の赤い強騎士たちじゃない。

騎士団長を含む、赤い強騎士の中でも最強と言われているS級騎士二十人。

真紅の強騎士。

別名クリムゾンナイトと言われている人たちは皆、私たちと一緒にテーバイに来ていて、これから合流するところだ。今ドンバツセル領にいるのは……

「お父様！ 今ドンバツセル領にいる騎士たちで、このスタンピードを取束させられるのでしょうか!？」

「私が慌てているのはそれだ。私たちと一緒に来ている真紅の強騎士がいなければ、スタンピードの取束は厳しい……私はドンバツセル領の騎士たちを犬死にさせたくない。誰一人、死なせたくないのだよ!」

本当なら数日で戻ってくる予定が、アクダマス侯爵の件もあり予定よりも余分に時間がかかった。真紅の強騎士たちすべてを連れてくるなんてことは、本来しないんだけど、いつも前線で頑張ってくれているので、今回は休暇も兼ねて全員が私たちに同行している。

それが……まさかこんなタイミングで、スタンピードが起るなんて!

それでも、残っているドンバツセル領の強騎士たちは、王都の騎士たちの何倍も強い。だから、無理に頑張ってしまうんじゃない。

どうにか私たちが王都に到着するまで、頑張っていてほしいけれど、無理しないでほしい。心底思う、魔導船をもらっていて本当に良かった。

これがなければ私たちは、間に合わなかっただろう。

—— だけど。

今からテーバイ帝都まで寝ずに走って半日、帝都からドンバツセル領には魔導船を使っても三日、それからエンディバン王都まで一日、私たちが王都に到着するには最速で四日半。

お父様の予測だと、魔獣の大群が王都に到着するのは三日後。

一日半……持つのだろうか。

大丈夫だろうけれど、赤い強騎士たちが全員無事とは思えない。だからお父様は、慌てているんだろう。さつきから拳を握り締め、黙って窓の外を見ている。

私だって、ずっと仲良くしていた赤い強騎士たちが亡くなるのなんて嫌だ。

どうにか王都に早くつけないの? その時——

ピコン!

—— 魔導船を改良したら一日早く着くことが可能です。

【叡智】「!」

厄災の魔王から奪ったスキル【叡智】が発動し、提案してきた。さすが困った時の【叡智】様! いいタイミングで登場しますな。

一日短縮できるなら、私たちが到着するまで半日! それならどうにかなる!

「改良したい! どうしたらいいの!?!」

——二十センチ以上の大きさの魔石ませきが十個あれば、スキル【錬金術れんきんじゆつ】を使って改良が可能です。
二十センチ以上の魔石!?

「あっ!」

あるあるあるある!

ジュエルボアを解体した時に出てきたのがいっぱいある!

「シャアアアア! いける!」

「ひっ!」

「レ、レティ!」

興奮のあまり、いきなり大きな声を出してしまったせいで、お父様とジュエルお兄様が驚いた顔で私を見ている。

「レティ、心配で不安だよね。でもね、お父様たちがどうにかするからね」

どうやら心配のあまり、奇声を上げたと思っっているようだ。

違うんです! 嬉しい奇声です。

「お父様、予定より一日早くエンディバン王都に着けるよう、魔導船を改良できるみたいなので、私は先におもちとテーバイ帝都に向かいます。おもちの足なら馬車の数倍速いので」

「ふえ!? 何言っつて!」

お父様の話を最後まで聞かず、私は馬車の扉を開けた。

「おもち! 背中に乗せて」

『まかせろっちい!』

馬車から飛び降り、おもちの背中に乗り移った。

「帝都まで、全速力でお願い!」

『わりえなら余裕っちい』

急いで船を改良しなきゃ!

★魔導船

「おもち、王城にある魔導船の船着場に、大急ぎで向かってくれる?」

『分かったっちい! なんで急ぐっちい?』

走りながら不思議そうに首を傾げる。急に背中に飛び乗ったのに急いで走ってくれたもんね。意味分かんないよね。

「エンディバン王都の近くの森で、スタンピードが起きたみたいなの! 今ドンバツセル領に残っ

ている赤い強騎士たちが向かっているんだけど、私たちも加勢に行かなきゃ！」

『なるほど！ よく分からんつちけれど、やつつけにいくつちね！ わりえに任せるつち！』

おもちがフンスツつと、鼻息荒くやる気を出している。おもちだったら一瞬で終わらせそうだ。

本気を出したおもちは、本当に速かった。【エアシエルター】の快適空間がなければ、私は背中に乗っていられなかつただろう。

おかげであつという間にテーバイの帝都に着いた。

おもちと帰ってきたから目立ったのか、城の中に入ると、慌ててお母様と王妃様が私とおもちに駆け寄ってきた。お母様もドンバツセル領の赤い強騎士たちの心配をしている。

「魔導船を改良したら、もう少し早くドンバツセル領に帰れることが分かつたので、今から改良してきます！」

「え？ レティ!?」

時間は無限じゃない、限られている。お母様への説明は後にして、私は魔導船が停泊している、城の船着場へと急いで走る。

屋上に繋がる階段を駆け上がると、私たちの魔導船が視界に入る。

急いで魔導船の中に入り、【叡智】を呼ぶ。

「よし、着いた。【叡智】、この魔導船が速く移動できるように改良するには、どうしたらいい

の!？」

——まずは十個の魔石を、スキル【錬金術】を使い魔核に磨き上げます。その完成した魔核を、船の動力に繋ぐと完成です。

スキル【錬金術】を使う？

あ、そういえば私、スキル【錬金術】を持つてるわ。……使ったことないけれど。

厄災の魔王、スキル持ちすぎだよ。いただいた私が言うのもなんですが。

というわけで、【無限収納】から魔石を取り出し、テーブルに並べる。

これを魔核とかいうのに錬金するのね。やったことないけれど、なんとなくできそうな気がする。魔石に魔力を慎重に流し込んでいく。

数分もするとガタガタの形をしていた魔石が、丸くツルツとした形に変化し、元の数倍も輝いている。

鑑定してみると、ちゃんと魔核って書いてある！

「ヨッシャアアア！」

成功し完成した魔核を握り締め、思わず声が出る。

あとはこれを動力があるところに、取りつけたら良いんだね。

んん……動力がある場所ってどこだっけ？ 私、そんな場所に行った覚えがない。

「あっ！」

そうだ！ ネットお兄様が籠こもっていた場所が、動力があったところだ。熱心に調べていたってリ
ンネお兄様が言っていた。船の操舵室そうたしやうから、動力がある部屋へと下りていけたはず。

慌あわてて操舵室に向かい下りていく。一回しか行ったことがなかったし、よく見ていなかったから
分からなかったけれど、いろいろな魔道具らしきものでいっぱいだった。

「え……ちよつと待って？ もつと単純なものだと思っていたのに！」

こんな複雑な構造……そもそも魔核をどこに置いたら良いのかさえも分からない。

「エイチエモーン！ 魔核をどうやって取りつけたら良いのか分からないよう」

半泣きで某メガネのキャラクターの如く、【叡智】に縋すがりつく私。良いんだ、今の私は六歳なん
だもん！ と開き直る。

——船を動かすための魔核が集まっている場所があるはず。そこに魔核を足してください。

魔核が集まっている場所？

壁につけられた魔道具や動線をよく見渡していくと、一番複雑になっている場所を発見する。す
べての魔道具の動線が、その場所に集まっている。

「あつた！ これだあつ」

透明とうめいの丸い扉の奥に、魔核がたくさん入っていた。この中に入れたらいいのね！

取っ手がついていたので、ギュッと握り締め、引っ張って開けようとするも。

「あれ!？」

開けようとしても開かない。入り口が固く閉じ、びくともしない。

なんでえ！ せつかく魔核を入れる場所を見つけたのに！

「ん？ これは？」

よく見ると、丸いボタンのようなものが取っ手の横についている。もしかしてこれを押すの
かな？

ポチッと押してみるも……

なんで!? なんて何も起こらんのやあああ！（焦るあまり、イメージナリー関西人登場）

これどうしたら良いんだろう？ お父様たちが着く前に完成させたいのに！

『あるじい？ 何をうんうん唸うなってるつち？』

一人で焦っている私の姿を見たおもちが、キョトンとした目で見てくる。

「いやね、おもちには難しい話かもだけど、この魔核を入れる扉が開かなくなってるね。開くボタンば
いのもあるのに、押してもまったくね。どうしたもんかと困ってたのよ」

おもちさんに分かるかな？

『ふうくん？ 魔道具ならなんで魔力を送らないつち？』

おもちはその言ってボタンを押す。

「いやいや、そんな簡単なことではなくってね？」

ガチャン！

『ほらあ！ 開いたっちい』

おもちが鼻先で扉を開けた。

「あつ、おつ、おん……扉、アイター」

ナンデヤアアア！ ナンデコンナことも分からなかったんじゃあ。

恥ずかしさのあまり、よく分からぬイマジナリーさんが出てきた。

この後、中に魔核を放り込み、扉を閉め、魔力を再び注ぐと完成した。

その数分後にはお父様たちが到着したので、タイミングとしては完璧だった。

——ただ少し。ほんの少し『あああああああ』と叫びたくなくなるような恥ずかしい気持ちになつたのは、心の奥にしまった。

★戦いの開始だあ！

テーバイ帝国から急いでドンバッセル領に戻ってきた。

改良した魔導船のおかげで、予定していたよりもかなり早く着いた。

これには、お父様たちからも感謝されたけれど、急に馬車から飛び下りて走り去っていったことに関してはこっぴどく怒られた。慌てていたにしろ、ちゃんと説明せずに勝手な行動をしたらさすがにダメだ。反省してます。思い立ったが吉日と、考えなしに行動してしまう時もあるので、それで皆に迷惑をかけたら最悪だし、ちゃんとしなくちゃ。

魔導船から下りると、赤い強騎士たちは大急ぎで準備に向かう。

かつて魔国で地獄の門番と呼ばれていたケルベロスの友達、ノリマキがおもちを見つけ、凄い勢いで走ってきた。そんな二匹を横目で見ながら、私はジュエルお兄様の後をついていき、何かお手伝いしようと思ったのだけど……

「早く自分の武器を運び込め！」

「「「はい！」」」

「騎馬の準備完了！」

「治療薬の準備完了！」

……これは、逆に邪魔になっちゃうな。おもちたちがいるところに戻るか。
『おもちどん、どしたんだあ？ んったら慌てでえ？』

『ノリマキ！ 今から森に行って、いっぱいやっつけるっちよ！』

『やっつける？ よく分からんが楽しそうだなあ。おいどんも行くがぁ』

おもちとノリマキが何やら楽しそうに話している。

そこに、黒竜くろりゅうのブラックサンダーが子供たちを背に乗せ、私の目の前に飛んできた。

『レティ。久しいのう。旅は楽しかったか？』

「サンちゃん！ 楽しかったけどいっぱいハプニングがあつてね」

『ほう、ハプニングとな？ 何かは知らぬが、一緒に行ったクローは楽しかったみたいじゃよ。他の子供たちも怖がらんと一緒に行けばよかつたと言つておる。良い経験をさせてくれてありがとう』

「それなら良かった！ ゆっくり話したいんだけどまた私、行かなきゃなの！ 戻ってきたらいっぱいお話ししようね！」

お父様たちは準備が終わつたのか、皆に集合をかけている。私も行かなくちゃ！

「サンちゃん！ また後でね」

『やれやれ、慌ただしいのう』

サンちゃんに別れを告げ、大急ぎで魔導船に乗り込む。

そうだ、おもちも呼ばなきゃ。

「おもちー！ もう出発するよー」

『ぬう？ 分かつたっちい！』

おもちにも行くよと声をかけると、ノリマキも一緒に走ってきた。

んん？ お見送りしてくれるのかな？

『おいどんも行くだべ』

「え？ ノリマキも来るの!？」

『そうっち！ いっちょにスタンピをやっつけるっちい！』

そう言つて二匹は、魔導船に乗り込んだ。

ケルベロスのノリマキまで協力してくれるとなれば、スタンピドをいち早く収束できる。ありがたい！

なんだけど、この二匹、スタンピドを理解していないような匂いがブンブンする……まるで遠足前の小学生のような感じが。スタンピドを、何か楽しいイベントと勘違いかんちがしてないよね？

おもちたちの楽しそうな雰囲気とは真逆に、お父様たちが待機している場所は、鬼気迫るききせま雰囲気デピリデピリしている。

前は酒を飲み「ガハハ」と笑っていたんだけど。今はいつでも戦えるよう、各々が武装して戦闘態勢に入っている。

なんだろう、戦う前に精神統一している感じだろうか？

あと三十分でエンディバン王都に到着する。

皆の精神統一を邪魔するわけにはいけないので、私はおもちたちを連れ、船の甲板に出てきた。そこで再度、おもちとノリマキにスタンピードの説明をすることにした。

「あのね？ これから行く場所ではたくさん溢れ出ている魔獣を討伐しないといけないの！ だから楽しいことではないんだよ」

『ぬうん？ わりえはあるじいのためになつたら嬉しいっち！ だからわりえに任せるっち！』

『おいどんも、よく分からんがまがせてくれ』

二匹はあっけらかんとしてニコニコしている。さすがというか……これが最強たる余裕なのか。なんて思っていたら、スタンピードが発生している王都近くの森に到着する。

お父様たちや赤い強騎士たちは騎乗し、スタンピードが発生している場所へと向かっていく。私も、後を追ってついていくつもりが……おもちの背に乗った私の速度は、尋常じゃなかった。

あつという間にお父様たちを追い越し、ノリマキとともにスタンピードの現場にいち早く到着した。ここでは赤を纏ったドンバツセル領の赤い強騎士たち、さらにはエンディバン王国の騎士たちが、大量に溢れ出た魔獣たちと必死に戦っていた。

その数は想像していた数の倍であった。騎士たちは息絶え絶えで今にも倒れそう。

そんな状況下に息を呑み、緊張が走る。こんなの……どうにかできるのだろうか！？

固まる私とは正反対に『あるじいー！ あいちゅらを、やつつけるっちっ』『ほおお！ おいどんに任せる』と、二匹はのんきに現場の空気を楽しんでた。

『うっ、うん。やつつけるんだけど……』

二匹は赤い強騎士たちの周りにいた魔獣を、まるで準備運動でもするかのように一瞬にして駆逐していく。そんなおもちたちの姿を見て、赤い強騎士たちの士気が上がる。

逆に王国の騎士たちは、フェンリルとケルベロスがいきなり現れたものだから恐怖に慄き、悲鳴を上げ、逃げ惑ったり腰を抜かしている。

それを見た赤い強騎士が味方だと伝え、安心させていく。

さらに、自分たちがおもちたちの邪魔にならないように、王国の騎士たちを引き連れ、下がっていく。さすがドンバツセルの赤い強騎士。連携が取れている。

「レティシア様！ おもち様を連れてきてくれてありがとうございます。ケルベロスのノリマキ様まで一緒とは心強いです」

赤い強騎士の一人が私の前に来てお辞儀をする。その姿はもう息をするのも絶え絶えで疲弊している。

——この人知ってる。

以前、真紅の強騎士を率いる騎士団長——アベルさんが紹介してくれた。

『姫！ 紹介します。こいつはジークって言って、今は第二騎士団の団長をしていますが、後に真紅の強騎士団に入ってくる実力者です』

『いやっ、アベル騎士団長、恐れ多いです。レティシア様、よろしくお願いします』

『ジークさん、よろしくお願いします』

なんて会話を交わしたっけ。

「ジークさん。今まで魔獣から守っていただきありがとうございます。今は少し休んでください」

「レティシア様！ ありがとうございます」

疲れているだろうに、ジークさんは騎士としての敬礼をやめない。

「もうすぐ、お父様たちと真紅の強騎士たちも到着すると思います。もう安心してください」

私がそう伝えると、安堵あんどの表情を浮かべる。

お父様たちと聞いて安心してんだらうな。

「ジークさん、これを飲んでください！ たくさんあるので、皆さんに飲ませてください」

私はジークさんに【真・妖精の湖】の水を渡す。

大きなドラム缶のような透明な容器に入った大量の水がいきなり目の前に出てきて、ジークさん

は一瞬驚くも、すぐに冷静になり私が渡したコップで水を汲み、喉をならし飲んでいく。

「こっ、これは……!?!」

疲弊していたジークさんの顔色が、みるみる良くなっていくのが目に見えて分かる。

湖の水を余分に汲んでいて、良かったなと心底思った。この水を飲めばポーシヨンレベルの回復が見込める。これで少しでもこの場にいる人たちを癒せれば。

『ぬううん！ また来たみたいっちなね』

『なんぼでも来い！ おいどんが蹴散らしてやる』

どうやら次の魔獣の集団が来たようだ。一体どれだけの魔獣がいるんだ。

襲ってきている数が分からなければ、果てしない戦いをしているようなもの。

そう考えたら、スキル【魔眼】がスタンピードで発生した魔獣の居場所、さらに数を教えてくれた。今集まっている以外に、さらに奥にもいるようだ。

これは奥で何かが発生している!? 【魔眼】で見ると、奥の方に魔獣がかなり集まっている場所

がある。そこが原因では!?

私を背に乗せ、おもちとノリマキが目の前にいる魔獣たちをどんどん蹴散らしていく。

この二匹だけで大丈夫そうだけど、数分するとまた同じような魔獣が登場する。

これは奥を確認しに行かないと。

だけど、魔獣たちを駆逐しながら進むのでは、気になっている奥の場所へ、中々到達できない。「レティ！ 待たせた。おもち様、ノリマキ様もありがとう！」

「お父様！」

真紅の強騎士を引き連れられたお父様たちが到着した。

「姫！ 私たちにお任せください」

騎士団長のアベルさんが、騎士を引き連れ私たちの前に立つ。これなら奥まで行ける！

「お父様！ 少し気になる場所があるので、ここはお任せします！ おもち、行こう」

「気になる場所!? レティ!?」

集まっている魔獣たちをすり抜け、奥へと進む。

「おもち、ここを少し左に行つて！」

『分かったつち』

『どこに行ぐんだー?』

「もう少し！」

あと少し走れば……この先にきつと答えがあるはず。

着いた！

「なっ!? 迷宮!?!」

なんと王都近くの森に、迷宮ができていた。

高さ六メートルくらいの四角い建物に、大きな入り口がポツカリと穴をあけている。

入り口にいる魔獣をおもちがすべて駆逐するが、約五分間隔で、迷宮から魔獣が数匹、定期的に出てきていた。

その魔獣たちが、王都に向かってやって来ていたのだ。

こんなの、永遠に終わらないじゃない。そもそも、迷宮から魔獣が溢れ出てくることなんて、ゲームの世界ではなかった。まあ、ここは現実世界なわけで、少し違うのかもだけど……

魔獣もAランクやBランクばかりで、どう見てもこの迷宮はAランク以上。

そんなやばい迷宮が、王都近くの森にあるのも絶対にヤバイ。王都の騎士たちでは対応できないので、ドンバツセル領の騎士たちが駆り出されるのは当然だ。

「【叡智】！ これ以上迷宮から魔獣が出てこないようにするにはどうしたらいい!? 迷宮を塞ぐことってできないかな!?」

——入り口を破壊し、スキル【牢獄】を使用した後、森で採取した鉄鉱石を【錬金術】で錬成し、さらに硬い鉱石【魔鉱石】に変化させます。魔鉱石で破壊した入り口を塞げば魔獣はいつさい出てこられません。

そうだ！ 【牢獄】を使えば良いんだ。アクダマス兄弟の秘密の屋敷で使ったスキル。

とりあえず入り口を破壊したら良いんだね。

「入り口の破壊……どうやるう？」

——魔法【テンペスト】を使うと、どんな硬い物も爆破できます。

そんな魔法があるの!? ゲームでのレティシアは、使ってなかったような。常にスキル【即死】ばつか使っていたものね。まあ破壊できるならやってみよう。

「おもち、ノリマキ! その入り口爆破するから、魔獣たちをやっつけたら私のところに来てね」

『分かったっち!』

『んだ!』

おもちたちが出てきた魔獣たちをすべて駆逐する。あと五分は出てこないだろう。

おもちたちが私のところに下がってきた。

よし! やるぞつ。迷宮に向かって手を翳し——

【テンペスト】

ドゴオオオオオオオオオオオオツ!

「はえっ!」

耳をつんざく轟音が響き、目の前の迷宮は消え去っていた。

いや建物どころか、半径百メートルくらいにあった木々すべてが消え、更地と化した。

いやいやいや【叡智】さん! この魔法はやりすぎやつて! もっと普通のやつあったやろおおお!

などといマジナリー関西人で悶えていた私は、まさかすぐ後ろに、魔獣たちをすべて駆逐したお父様たちが追いついてきていたなんて、気づいていないのだった。

★封印しますわ!

「レレレレレティツ!」

「ハイッ!」

急に背後から声をかけられ、素つ頓狂な声で返す。

振り返ると、ワナワナと震えるお父様が立っていた。その後ろには真紅の強騎士もいるが、表情は皆お父様と同じ……お父様はどうか震えを抑え、私のところに走ってきた。

「いつ、今の爆発はレティが!」

「ええと……それは、そうなんですが……」

「あんな大爆発を一体どうやって!」

顔面蒼白で私に問いかけるお父様。

急にあんな大爆発を目にしたらそりゃそんな顔になりますよね。

私だって、ビックリしたんだもん。

なんでこうなったかの事情を、お父様に詳しく説明するべきなんだけど、早く終わらせないと、五分経ってまた魔獣たちが出てきちゃう。

「お父様、ちよつと待っててくださいね！ 私まだすることがあるので」

「えっ？ することって……」

お父様との会話を切り、私は迷宮があつたであろう場所に向かって猛スピードで走っていく。

そこにはポツカリ空いた穴から、かなりの魔獣が這い出てこようとしていた。

「ヒイツ!？」

なにこれ気持ち悪い！ まだこんなにいっぱいいたの!?

【牢獄】！

慌てて【牢獄】を使う。見えない結界のようなもので閉じ込めるのだ。

「ふう〜……間一髪」

もう少し遅かったら、また大量の魔獣が出てきていた。

今度の魔獣は見るからに数が多かった。防げて良かった……

「レティ！ なんだこの穴は!？」

「うわっ、なんだこれ!？」

「穴から魔獣が溢れてやがる」

安堵のため息を吐いていると、私の後を追ってきたお父様たちが、穴を覗き込み驚く。

そりゃそうだよな。魔獣が溢れてくる穴なんて、ビックリだよな。

「あの、お父様、今回のスタンピードは、ここが原因だったみたいです」

「この穴が原因?」

この森に迷宮ができていたこと、さらになぜか迷宮から、魔獣が溢れ出ていたこと、迷宮の入り口を壊すために爆破し、【牢獄】で魔獣たちが出てこられないようにしたことを、すべて説明した。

「そんな……高ランクの迷宮が突如現れるなんて……」

お父様曰く、魔素が少ない場所には高ランク迷宮は出現しないらしい。迷宮の魔獣たちも地上にいる魔獣たちと同じで、魔素をエネルギーとして生きているので、こんなにも魔素が少ない王都の森で迷宮ができるのはありえないのだとか。

高濃度の魔素が蓄積されて迷宮ができる……知らなかった。

ただ、迷宮から魔獣が溢れ出たのは今回が初めての事例らしい。

とりあえず、大きな穴の下でウジャウジャと蠢いている魔獣を見ているのは気持ち悪いので、早

く魔鉱石で蓋をしくちや。

鉄鉱石と魔石を取り出し、魔鉱石に鍊金していく。

「レティ!? 今度は何が始まるんだい?」

急に大量の鉄鉱石を取り出したので、お父様が驚いている。

「この穴を【魔鉱石】で塞ぐと、迷宮は永遠に閉ざされると、スキル【叡智】が教えてくれたので、今その作業をしています」

「なっ、なるほど……う、うむ（レティは簡単に言っているが、そんな作業ができるのは熟練の鍊金術師だぞと言いたい。しかも【鍊金術】使えたの? 父、知らなかったよ?）」

お父様が返事をしてくれるも、なんとも言えない顔で私を見ている。

どうしたんだろう? 気になるが、今は【鍊金術】に力を入れないと。

鉄鉱石に魔石を置き、そこに手を翳して鍊金していく。すると黒かった鉄鉱石が光を帯び、黒く艶のある石へと変化していく。光を浴びると虹色に輝いている。

——これが魔鉱石!

「よし! できた」

目の前にある穴を覆えるほどの、大きな魔鉱石の塊が出現した。

ええと……この石をあのかの穴の上に置かないとよね。どうやって置こう? ……あつ!

風魔法で浮かせたらいけるかも! 大きな突風ではなく、ふわりと魔鉱石を浮かせるイメージでつと……頭の中でイメージして、風魔法を使う。

慎重に慎重に……前に風魔法を練習していた時に、大きな竜巻が発生して焦ったからね。

魔鉱石の塊は、ふんわりと浮き上がった。

よし! あとは移動させるだけ。

フヨフヨと浮きながら、魔鉱石の塊は迷宮だった穴にズドンっと入っていった。

これで穴は完璧に塞がれたかな?

【叡智】、これで大丈夫?」

——迷宮は封印されています。これで魔獣たちも出てこないでしょう。自然とこの迷宮はなくなります。

「お父様、これでもう大丈夫みたいです。迷宮は完全に封印できました」

「おおつ、そうか……うん。さすがレティ（ありえないよ。なんだあの大きな魔鉱石は。あんなの普通の鍊金術師が作れるレベルじゃない。それをあんな一瞬で。どうやって国に報告しよう……ああああ）」

私の頭を撫でて褒めてくれてはいるが、なんだか口元がピクピクし、笑っていないような。どうしたんだらう?

「お父様？」

「んん？ さあ、皆に報告に行かないとだ。奥で待っているからね（レティのしたことは、なるべく隠さないと……はああ、なんでうちの子こんなに凄いの!?)」

「はっ」

私が出した湖の水を置いた場所に皆が集まり、身体を休めているそうなので、真紅の強騎士たちとともに向かう。

『あるじい。もう終わったっち？』

『だいたいだごどながつだなあ』

おもちの背に乗って向かっていると、二匹は物足りなさそうに言った。さすがと言うか……

現場に到着すると、王国の騎士たちや赤い強騎士たちが私のところに集まり、挨拶やお礼を言うてくれる。おもちやノリマキにも頭を下げていた。

「ありがとうございます！ もう死を覚悟していました」

「妖精レティシア様！ このご恩は一生忘れません」

「フェンリル様！ ケルベロス様！ そして妖精レティシア様！ 感謝いたします」

なんだろう、妖精レティシア様とは？ 皆、妖精の湖と私がごっちゃになってない？

私は妖精ではないですよ？ 変な二つ名をつけないでもらいたい。

この後、お父様と騎士団長が王国の騎士の人たちに、スタンピードの原因となった迷宮の説明をしていた。どうやって封印したのかは上手く濁して。

しかし、私がおもちの背に乗り、バツタバツタと魔獣を駆逐していた話は、王都の騎士団から広がり、その話は瞬く間に噂となって王都の貴族たちにも広がっていくのだった。

さらに噂にはおひれがつくもので……強騎士の活躍とか厄災の魔王の話まで混ざり、厄災の悪役令嬢と恐れられていく。

「ふう〜やつと。のんびりできるね」

『わりえは……お腹いっぱい……つち』

自室に戻り、おもちと一緒にベッドに寝そべり身体を伸ばす。

おもちは早くも夢心地のよう。王都の森では大活躍だったしね。お疲れ様、おもち。

私たちはあのスタンピードの一件から、やっとドンバツセル領に戻ってこられた。

お父様たちは一度領に戻ってきてから、再び真紅の強騎士たちを連れ、森の調査に向かった。

どうやら迷宮ができていた場所だけ、魔素の濃度がかなり濃くなっていたようなのだ。

その原因を探るんだとか。

確かにその謎は気になる。だからってお父様たちが行くのもなあ。

また強い魔獣が出てきたら困るから、お父様たちが対処するのは分かるけれど。エンデイバン王国の国王陛下を筆頭に、全部お父様に任せすぎだよ。少しはティーバイの皇帝陛下を見習ってもらいたいところ。お父様たちは戦うことが嫌ではないから、断らないんだらうけれど。

一週間はのんびりして良いと言われたから何しようかな？

そうだ！ 料理長と新メニューの研究でもしようか。

「んふ〜♪ 楽しみだな」

この後、お母様たちが夕食に呼びに来てくれたけど、私は次の朝までぐっすり眠ってしまった。

★ベーコン革命

「レティ！ こんなところで何してるの？」

「ジュエルお兄様」

「あはは、顔に泥どろがついているよ」

ティーバイで入手した香草を畑に植えていたら、ジュエルお兄様がやって来た。

この畑はお父様におねだりして作ってもらった私の特別な場所【レティの箱庭】。

はじめはただっ広い更地だったこの場所だけど、今はいろんな野菜がたわわに実っている。

新しく植えたこの香草たちもちゃんと根ねづくると良いなあ。

そうしたら、わざわざティーバイに買いに行かなくても良いもの。

たくさん増えたらいろんな料理を試すんだ。

「ぐふふっ……」

「またレティったら葉っぱみてニヤニヤして……本当草が好きだねえ」

ジュエルお兄様が、またいつものことかと呆おろれたように私を見る。

また変な笑い方をしてしまった。今では家族皆が、私が草好きの変なやつ認識になっている。

だってね？ 香草があると料理の幅が広がるんだよ？ 欠かせないアイテムなんだから！

「僕もこの草を植えるの手伝うよ」

「草じゃないです！ 香草です」

「ふふ、そうだね。香草」

ジュエルお兄様のお手伝いもあってか、予定よりも早くすべての香草を植えることができた。

「この後は何をするの？ 僕は今日の稽古けいこはすべて終わったから時間があるんだけど」

「そうなんですか？」

この後は、天気も良いしベーコンの燻製くんせいをしようと思っていたんだけど。

お暇なら、ジュエルお兄様にもお手伝いしてもらおうかな。

「今からベーコンを作るんですが、お兄様も手伝ってくださいますか？」

「ベーコン！ 美味しいよね。僕大好きなんだ、任せて」

ジュエルお兄様が、瞳を輝かせながら大きく頷いた。

「ただねお兄様、燻製はそう簡単にはいかないんですよ？」

「え？ ここは？」

「ジュエルお兄様は初めて来ましたよね。ここがレティの燻製所です」

「……これが？」

小さな小屋の前に立つと、キョトンと目を見開き、固まるお兄様。

「ささ、入りますよ！」

十畳ほどの広さの小屋の中に一緒に入ると、ジュエルお兄様が不思議そうに部屋の中を見ている。ふふふ、ここは燻製をするためだけに建てた小屋。

はじめは少量を料理長と一緒に燻製していたんだけど、ドンバツセル領でベーコンが大人気となり、生産量が需要にまったく追いつかなくなつたのだ。

その理由は、ベーコンの非常食としての良さ。今までは日持ちする硬い干し肉などが遠征に持つ

ていく非常食だった。それがジューシーで美味しい肉が遠征でも食べられるとなり、ベーコンは非常食の革命食となつた。他にも燻製したウインナーなども大人気。

そうなれば、ウインナーの数も需要にまったく追いつかなくなり、こんな特設小屋まで建てたのだ。

小屋の屋根から熟成肉が大量に吊るされている。それを今から燻していく。

「桜サクラ香木カウキに火をつけて、今からこの肉を燻していきます」

「この香木で燻すのか……」

私のお気に入りの香木に火をつける。すると勢いよく煙けむりが溢れ出て……

「っ!? ゲホッゲホ!?」

「お兄様、□元をハンカチで覆ってください」

想像以上の煙が一気に吹き出し、お兄様が息ができずに咳せき込む。

「んっ……」

「さあ、部屋を出ますよ！」

大量に香木を燻すから、はじめにもすごい勢いで煙が発生するのよね。百キロほどある肉を燻すんだから。部屋の扉を慌てて閉めて外に出る。

「あとは、半日待てばベーコンの完成です」

「あははっ、すっごい煙だね。たまに料理長やレティが煙臭かったのは、これが原因か」

「ふふふ、美味しいベーコンにはこの煙、必要不可欠です」

「あははっ、確かにね」

明日はハイポーシヨンの材料を深淵の森に取りに行こうかな。

久しぶりの、のんびりとした日常はかなりの癒しとなった。

もうそろそろ、お父様たちが帰ってくる頃かな？

★レティシア、七歳になりました！

お父様が王都から帰還してきたのだけど、その表情は険しかった。

「食事の時に、王都の森の調査報告がある」と言っていたので、どんな報告があるのかと、私とジュエルお兄様は食事に手をつけず、静かにお父様の口が開くの待っている。

お父様の沈黙が長いほどに、その場の空気が張りつめる。

「……ンンッ！ よく聞いてくれ」

やっと、お父様が重い口を開く。

「……調査の結果。大量の魔素を含んだ魔導石が、四つ発見された。魔導石があった場所は、レティが封印した迷宮の位置を、綺麗に囲うように四ヶ所に置かれていた。明らかに人為的に置いたものと思われ、かつその魔導石の魔素が迷宮を作り出したのだろう」

「え!? 人為的!？」

お父様の話を聞き、ジュエルお兄様が立ち上がって驚く。それは私も同じ気持ち。あのスタンピードは人為的に誰かが発生させたことになるのだから。そんなことありえるの？ じゃあその魔導石がある限り、定期的にスタンピードが発生することになる。

——ん? ……定期的に起こるスタンピード……そんなイベントあったような。

「あっ!? あれだ!」

「どうしたレティ? 何か気づいたのか」

「あっ、いついえ。そのう……目にゴミが入って、声が出てしまいました」

「……? そうか」

また、心の声が出ていた。お父様が私を不思議そうに見ている。

きつと私が、厄災の魔王の力で解決案を閃いたのかもど、期待させてしまったに違いない。

違うんです。今回は、前世の記憶の方なんです。

確か、ゲーム『エデン』の世界でも一定の期間が経つと、王都の森でスタンピードが発生するイ

ベントが定期的にあった。戦闘職の人たちは、スタンピードが起こると「イベントきたー!」と、お小遣い稼ぎに行っていた。もちろん私もイベントに参加していた。だってスタンピードとは名ばかりの、ご褒美イベントだったから。

だけど、今はスタンピードを解決してくれるゲームプレイヤーはいない。なので自分たちだけで解決しないといけない。今回のスタンピードがそのイベントにあたるものだとしたら。

お父様たちが発見した魔導石は、定期的にスタンピードを発生させるための装置なのでは……? じゃあ、その魔導石を破壊すれば問題解決するんじゃない? いや……何が引っかかる。

——あつ、そうか! 分かった。

どうして、王国近くの森の魔素が少ないのか。

謎の魔導石が、王国の森の魔素をいっぱい吸収して集めているからだ。だから、王都の森には弱い魔物しか生息できない。だけど、時間をかけて魔導石の魔素が満タンに集まれば、また今回と同じスタンピードが起こる。

ゲームの世界では、一年周期で発生していたけれど、私がこの世界に誕生してからは、この前が初めてだった。つてことは、スタンピードが起こる周期は、ゲームと同じではないのかもしれない。今の私がもう少し七歳。それまで発生しなかったことから、次のスタンピードまで最低でもあと六、七年はある。

この内容を、お父様に上手く説明するのはかなり難しい。どうしたものか。
まあ、次のスタンピードはおそらくかなり先なのだ。よし、黙っていることにしよう。
(いやいや、あかんで! それは臭いものに蓋しただけやでレティシアー!)
イマジナリー関西人が心配して登場したが私は黙秘することを決めた。
なんとも言えない感情の中、久しぶりの家族の会食は終わった。

★

「レティ、とっても似合ってるよ」

「ふふ。ありがとうございます。ジュエルお兄様も素敵ですよ」

「ありがとう。そろそろアレク兄様やリンネ兄様、ネイト兄様たちが到着する頃だよ」

いろいろあったが今日は私の誕生日。なんと、七歳の誕生日をお祝いするパーティーを、ドンバッセル領で開催してくれることに。

学園に通っているお兄様たちとも久々の再会。とっても楽しみである。

久しぶりに会うターバイの皇帝陛下やライオスも、来賓として来てくれるそうだ。でもその中に、喜ばしくない人もいるわけで……

立ち読みサンプル
はここまで

——私の（一応）婚約者である第二王子エリックと国王陛下も来るといなのだ。

これはもちろん、テーバイ皇帝陛下が来るから、親交を深めるために私の誕生日をダシにしてるのだが。エリック王子とは婚約した日から会っていないので、久々どころではない。これで婚約者と言えるのかすでに微妙。さらに今回は、私と同年の王女殿下も一緒に来るらしい。

ゲームでは登場しなかったから、王女殿下がどんなキャラなのか、まったく分からないけれど、あの王子の妹だもの。あまり期待しないでおう。

楽しいことの反面、面倒なこともあるなぁと考えていたら、部屋の扉がノックされメイドが入ってきた。

「アレクサンダー様、リンネ様、ネイト様がお帰りになりました」

「帰ってきたんだ。レティ、迎えに行こう」

「はい！」

面倒なことは頭の中から一旦消去して、今はお兄様たちとの久々の再会を楽しもう。

私とジュエルお兄様は、急いでお兄様たちを迎えに行った。

「レティ！ 大っきくなっただな」

「アレクお兄様！ お帰りなさい。ふふ、まだ四ヶ月ですよ。身長はさほど変わってませんよ」

アレクお兄様が私を抱き上げ、優しく頭を撫でってくれる。

「レティただいまあー！ 相変わらず可愛いね。ついでにジュエルもただいま」

「リンネお兄様、お帰りなさい」

「なんだよ！ ついでって」

ジュエルお兄様とリンネお兄様が戯れ合っている。なんだか久しぶりに見られてほっこりする。

「ただいま」

「ネイトお兄様、お帰りなさい」

お兄様たちが全員揃った。

この後、お父様とお母様も準備を終え、私たちと合流した。

「よし、皆揃ったな。レティの誕生日を盛大に祝おうではないか」

お父様を筆頭に、用意してくれた会場へと向かうわけなんだけど。

アレクお兄様が、私を抱いたまま会場に向かっている。ええと、私も七歳になったわけで、抱っ

こで会場に入るのはちよっと……しかし結局、そのまま会場に入ることに。

会場の中はかなり人が集まっていた。入場した私たちに注目が集まる。

お父様の祝辞の後、パーティーが始まった。

パーティーが始まると、いろんな令嬢が我先にと、アレクお兄様のもとに集まってきた。婚約者もない年頃のアレクお兄様は令嬢から大人気のよう。